



Title	Can see/hear/…とBe seeing/hearing/…と
Author(s)	好田, 實
Citation	大阪外大英米研究. 1994, 19, p. 27-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99167
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Can see/hear/...と Be seeing/hearing/...と¹⁾

好 田 實

1. 受動的知覚動詞 (verbs of inert perception) が法助動詞 can に続くときと、can を取らずに進行形になるときの意味・用法上の違いを示すとともに、その過程で現代英語における進行形の本義を明らかにすることが本論文の目的である。

そもそも、知覚は感覚器官が外界の刺激を受けて起こる現象であるから、その意味ですべて受動的 (passive) であるが、ここに言う受動的知覚とは、意図的積極的に刺激に反応しようとする姿勢の能動的行為 (look, listen など) と区別された、感覚の不随意不活性的な反応のことである。

受動的知覚は、主語の位置に、(i) 知覚する者を置くのと、(ii) 知覚の対象を置くのとで、二通りの表現に分かれる。五つの感覚に応じて (i) では see, hear, feel, taste, smell が、(ii) では look, sound, feel, taste, smell が用いられる。

(i) (1) I (can) see a bus in the distance.

(2) Don't strike a match when you smell gas.

(ii) (3) The house looks empty.

(4) The room smells of tobacco.

視覚と聴覚以外では (i) と (ii) に共通の動詞が使われる。因みに、これら触覚、味覚、嗅覚では、能動的行為 (iii) にも (i)、(ii) と同形の動詞が用いられる。

(iii) (5) Smell these flowers — they've got a lovely scent.

本論が扱うのは (i) の場合であり、次例のように notice, observe もこの部類の動詞として用いられることがある。

(6) I noticed her leave the shop. (Declerck)

(7) Did you observe anything unusual in his behaviour?

(LDOCE²)

しかし以下では主に see と hear を取り上げる。

はじめに笑話の一つ。ここに登場する患者は医者に向かってどのように自分の症状を訴えたのであろうか。

To a patient who complained of two things: (a) that he saw spots before his eyes, and (b) that he had no job, a doctor in the Beth Israel Hospital, Newark, suggested a double-barreled cure.

“What is it, Doc?”

“Go over to the Bronx Zoo and get a job washing the leopards.”

— Francis L. Golden, *For Doctors Only*

答はしばらくお預けにしておこう。

2. 受動的知覚を表わす see, hear などは状態動詞であり、通常進行形を取らないとされている。他方、これらの動詞は can と共に用いて、(8) のような内在的、恒常的、従って機会があれば反復して発揮される能力という can の普通の用法のほかに、(9) のように現実に知覚している状態を叙することのある点が注目されている。

(8) Owls can see in the dark.

(9) Look at this chart. Can you see it ?

Can see/hear/...と Be seeing/hearing/...と

後者の can について、Palmer (1974;1990²) は can を用いない時に較べて意味上何らつけ加えるところもないので、能力の用法と同一視できないと言ひ、慣用的なものとして説明を諦めている。Coates (1983) も同様に、能力の概念の希薄なものとして特別扱いをし、さらには、この形式が「I am seeing などの許容されない進行形に代替するもので、アスペクト的である」(p. 90) と言う。しかし、以下の考察から、この can は逆に本格的にモーダルであると見るのが素直であろう。

まず、この種の動詞も進行形を取ることができる。

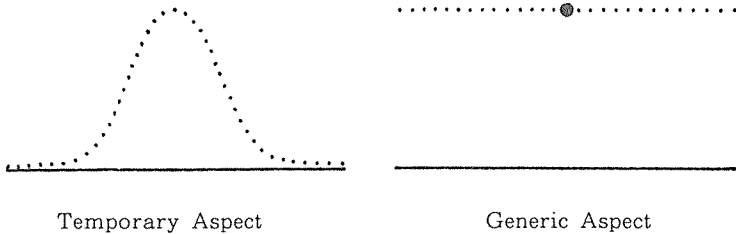
(10) I am hearing you clearly.

(11) I am not seeing things so well these days.

Leech (1987²) は無線技師などの発する(10)は I am receiving your messageを意味するとして、この hear を過程動詞 (process verb) と見做しているが、hear a bell の hear と本質的に異なるものではない。²⁾ (11) も Quirk *et al.* (1985) は過程に焦点が当てられていると言うが、Leech と同様に過程動詞と考えているとすれば問題である。視力の衰えゆく過程での発言であっても、受動的知覚動詞としての see に変わりはない。なお、process という術語も文法家の間で異なる用い方がされるので注意しなければならない。Process の成分である「変化」と「継続」のうち「継続」だけに重点を移している場合も多いし、Joos (1968²) などは process verb を状態動詞に対する動態動詞 (dynamic verb) と同義的に用いている。

進行形の本質を不完結相に求める一般的な扱い方は、状態動詞が進行形にならないのは、動詞自体が類似の相を持つからだと一応説明できても、英語に数多く見られる状態動詞の進行形を前にして効力を失う。そこでその都度動詞が意味素性の異なる別類の動詞に変身しているように曲解される。不完結相は副次的なものであり、進行形の根本義を説くものとしては、Joos³⁾ の temporary validity 説が勝れている。英語の進行形は、スラブ語やロ

マンス語のアスペクトのように、ある出来事の内部の時間的構成に関する見方を示すものでは必ずしもない。Joos は他により良い名称がないとして temporary aspect と呼んでいるが、彼によれば、それは叙述の妥当性を問題にするものである。すなわち彼は一時相 (temporary aspect) (一般的な習わしによってわれわれがここで進行形と呼んでいるものを、彼の一般相 generic aspect に対してそう呼んでいる) を、基準時において叙述が100% 妥当であり、その妥当性の公算が基準時を頂点として、その前後の時間に逓減することを示す文法形式と規定し、下のように図解している。



基準時から前後に離れるに従って見込まれる妥当性の逓減は文脈に依存するものであることは、次例の示す通りである。

(12) I've been watching you.

(13) She was crossing the street when she was knocked over by a lorry.

(12) では、妥当性が発話時になくなることもあるし、なくなることもあろう。(13) では、彼女が車にはねとばされた時点で、それは消滅せざるを得ない。話者の専らの関心は、少なくとも基準時における叙述内容の一時的妥当性にあると言うべきであろう。

一般によく行われるアスペクト的解釈に少し話を戻してみる。

Can see/hear/...と Be seeing/hearing/...と

(14) When I saw him, he was running away.

(15) a. You don't feel well?

b. You are not feeling well?

(14) は、少なくとも「私が見た時」において「彼が逃げて行く」のは間違いないことであったことを示していて、それ以上は述べていないので、結果的に「逃亡」は不完結の姿で捉えられている。すなわち、ここでは進行形が不完結のアスペクトという時間的な状況記述をしていることは間違いない。主節を he ran away とすれば「逃亡」は完結相になる上、「見た」のちに「逃げた」ことになってしまう。しかし、身体感覚の状態動詞 feel を用いた (15a) と (15b) の区別を Joos 自身はうまく説明できなかった。気分の良し悪しは一時的な状態であり、いずれも「今の君の気分」を表現するのでアスペクトの面からは説明が苦しくなる。van Ek (1969) は、進行形使用の適切さという概念を導入して、Joos の説に修正を加え、(14) における objective relevance に対して、(15b) での進行形使用を subjective relevance として区別し、話者の主観的判断の加わったものとしたのである。これはつまり、進行形にはモダリティ表現の場合があると言っていることになる。⁴⁾ そしてこれが現代英語の進行形の特徴なのである。

例えば、(16)~(18) では、叙述内容が少なくとも基準時（3例とも現在で発話時と一致）において妥当であり、それを表現することが適当で大切であると話者が判断して有標の進行形を採用していると解釈できる。

(16) He is being kind.

(17) How are you liking your new job?

(18) I am seeing spots.

(16) は外に現われた親切な行為を拠り所にしても、表現の意図は、親切が恒常的な性格でなく——あるいは「平常」については態度を決定せず——

——一時的な状態であると言うにある。形容詞 *kind* が非状态的であるという言い方には賛成できない。(17) も一時的な——従って確定的でなくてよい——相手の気持ちを尋ねている。この *tentativeness* という副次的な意味が *I am hoping you'll give us some advice* のような控え目で丁寧な表現によく利用される。(18) の「斑点が見えるのです」は視覚の異常を一時的で治療されるべきものとして捉えている。⁵⁾

(19) He is getting up at six this week.

(19) でも、「彼の6時起床」は少くとも「今週」という基準時に関して妥当だと言うのだから、Leech の「限定的継続」の一つの場合としての「限られた期間にわたって存在する習慣」という説明と何ら矛盾しない。言うまでもなく、*at six* は基準時ではなく、それを一部とする '*he get up at six*' という命題に対して、時制を付与すると同時に、*temporary validity*——基準時 *this week* における——という概念の表現を加えるのが *relevant* であるとの話者の判断を *is+~ing* が示しているのである。一種の *epistemic modality* である。ここで注意すべきは、(15) の状態動詞 *feel* と異なる非状態動詞 *get up* でも、単純形で習慣という状態を表わせるが故に、「今週という期間を通じて彼が6時に起床する」という状況を *He gets up at six this week* でも表わせるということである。繰り返しになるが、その点(14) と *When I saw him, he ran away* (14') の対では事情が異なる。(14') は(14) と異なる状況の記述になってしまう。(15)~(19) では進行形使用の適切さが主観的判断によって加わったものであるのに対して、(14) ではそれが叙述内容自体に内在しているのである。*Objective relevance* と呼ばれる所以である。

進行形の根本の意義を論ずるときに、述語の語彙的意味の多様性に目を奪われ過ぎ、木を見て森を見ない議論が余りにも多い。

Can see/hear/...と Be seeing/hearing/...と

- (20) Someone is knocking on the door.
- (21) I was jumping 2m when the new coach was hired.
- (22) He is leaving tomorrow.
- (23) a. She is always finding fault with her husband.
b. She always finds fault with her husband.

(20) は瞬間動詞が進行形に用いられて反復動作を示す例である。Leech によれば、進行形が与える三つの意味——①継続、②限定的継続、③不完結の可能性——のうち①が与えられて生ずる解釈ということになる。われわれの解釈によれば、「誰かによるドアのノック」が発話時と一致する基準時において存在し、完結したものとして捉えられていないのであれば、その瞬間的動作は当然反復されていなくてはならない。(21) は、(20) と同種の動詞の「反復の解釈」例として Hofmann and Kageyama (1986) が挙げているものだが、これはむしろ (19) と同類のものであって、ここでは Mr. Robinson is cycling to work until his car is repaired (Leech) の例で明らかのように、動詞は、瞬間動詞に限定されない。⁶⁾ (22) は「彼の明日の出発」が「少くとも今の時点では間違いなく言える」のである。(23a) は、副詞 always があることによって「一時性」の欠落した慣用表現と扱われることがあるが、仮に (23b) の always を単純に一本の直線に見立てるならば、(23a) では、いわば、線を点に分解し、どの時点においても perfectly valid だという命題態度を、進行形によって示していると考えられ、感情のこもった誇張表現となる。⁷⁾

これまで、進行形の特殊な用法と言われるものを、Joos (1968²) を手直しした van Ek の説を利用して、進行形の基本的な意味に集約することを試みてきた。もう一つの、毛利 (1980) が「行為解説」と呼ぶものについても、何ら無理は生じない。

- (24) If he said so, he was lying.

‘「彼がそう言ったのなら」その時「彼が嘘をついていた」ことは間違いのない’ のであり、発言＝虚言となる。(25)～(27) はいずれも受動的知覚動詞の進行形であるが、やはりこの解釈を基本として理解すれば良い。

- (25) Am I really hearing what you are saying? (Joos)
- (26) ‘Yes, thirty years,’ Mrs Dalby said, looking slowly round the room as though she was seeing it for the first time. — J. Herriot, *Vet in Harness*
- (27) The *fumie* was now at his feet....The priest silently looked down with eyes dimmed and blurred at this face that he was seeing for the first time since he had come to Japan. — 九頭見一士、Hugh E. Wilkinson (訳)⁸⁾

進行形の成立条件を述語の非状態性とする文法学者が多いが、われわれは既に(16)でそれを拒否した。重要なポイントなので煩瑣をいとわず繰り返す。Comrie (1976) は、Fred is being silly を Fred is acting in a silly manner とパラフレイズできるので、この動詞 be は non-stative であると言うが、その論法でいけば彼がそれと対比させている Fred is silly を Fred always acts in a silly manner と言い換えることも不可能でなくなるのであり、本質を見ていない。Lakoff (1966) は進行形と命令文は等しく「状態性」という統語素性と相容れないと説いたが、その後多くの学者によって矛盾が指摘されている。両者に類似性はあるとしても、同一の物差しで測れるものでないことは既に明らかであろう。Kuno (1970) は命令文には〔+self controllable〕が必要である一方、進行形にはそれは必要でなく、決定的要因は〔+active〕であると言う。しかし、(28)の have to (be) を非状態〔+active〕と言うには明らかに無理がある。

Can see/hear/...と Be seeing/hearing/...と

- (28) I was not having to be Tony Crabbe at all, sitting in the sunshine watching the day go by. — Tony Wilkinson, *Down and Out*

社会の底辺の生活を1箇月体験取材するため、ボロをまとい名前を変えてホームレスとなったBBC記者が、最初の夜を乗り切って、公園でひとときの解放感を味わっているのである。ここで注目すべきことは、I did not have to be being Tony Crabbe でなく、have (to) が進行形になっていることである。話者のすなわち主観的モダリティのほうの主語的モダリティよりも上位の節点を占めるので、⁹⁾ 先に出ている進行形は正に epistemic modality の表現である。

進行形についての議論はこの辺で切り上げて受動的知覚動詞そのものの特性に移ることにするが、考察対象となる動詞を似て非なるものと峻別しておく必要がある。Sag (1973) が状態性にも程度の差があるとして、進行形との関係で動詞の状態性の連続階層体を論じた中で、know, love などと比較しながら取り上げている see や hear は、われわれが助動詞 can との結びつきで論じようとする純粋な意味での受動的知覚動詞ではない。すなわち、hear the concert,¹⁰⁾ hear what our opponents have to say, see a good play などほみな、知覚への積極的な姿勢や準備がある場合であって、inert でなく、active なものである。

3. さて、see, hear などには「私的動詞」(private verb) としての特徴のほか、状態の継続性に関しても特殊な事情がある。感覚器官への刺激が存在する間知覚状態が続き、刺激がなくなるとそれが終了する。刺激の有無を能動的に制御する場合 (look, listen など) は考慮外として、己の意思の及ばぬところで刺激が突如打ち切られることもある。一瞬1羽の鳥が見えて「あっ、鳥だ!」と叫ぶのは I see a bird! で、Leech はこれを単純現在の瞬間的用法 (instantaneous use) と見る。それは良いとしても、一般化して、I

can see の「知覚の状態」に対して I see を「瞬間的知覚」と呼んでいるのは問題である。状態と言えるに十分な刺激の継続があると思える I hear a door slamming や I see a bus in the distance の場合に、何故「知覚の状態」と言えないのか。これについては、トルコ語の inferential と evidential の動詞形態上の区別に関連させて、Binnick (1991) が「I see people over there では、見えているものが幻影であったり、話者が何かの間違いをしている可能性が残るが、can see だとその疑いが除かれる」(p. 473) と述べているのが参考になる。

Can なしの単純形は、特定の対象についての視覚や聴覚の客観的持続可能性には直接関係なく、むしろその感覚刺激によって生じた認知が反射的に口をついて出た、知覚即発話の表現である。(29)はその例である。

- (29) I smell gas. Is there a leak somewhere? (Alexander *et al.*)

これに対して、刺激に接し感覚器官が立派に機能していることを確認しながらの発話が I can see/hear/…であると解すればよい。確認を伴う知覚は持続性を前提とするのであり、これを指して Leech や Quirk *et al.* は「知覚の状態」と呼ぶのであろう。日本語の対応表現も「見えている／聞こえている／…」となり、確かに状態を示している。しかし can の「能力」、より正確に言えば「機能確認」の意味を無視して「瞬間」対「状態」と単純化するのは良くない。

Can なしの場合、反射的表出という事情により瞬間的知覚らしく見えるが、スポーツの実況放送などにおける単純現在の瞬間的用法——完結した動作——と同一視してはならない。動詞自体が瞬間相のものでないことは、Dou you hear (me)? と Can you hear (me)? の違いから明瞭である。後者が音の高さや距離の近さが十分で「聞こえ(てい)ますか」と言うのに対して、前者(「聞いとるのか」)は、大切な話なのに「居眠りしたり、上の

Can see/hear/...と Be seeing/hearing/...と

空であったりしては駄目だ！ 聞こえる状態か！」というわけである。

I see だと実際の視覚に関して不確かなままであるとの Binnick の指摘は、英語の過去時制には当て嵌まらないようだ。トルコ語の定過去 *gördüm* 'I saw with my own eyes; I could see' (evidential) に対して不定過去 *görmüşüm* 'I gather I have seen; after all it seems I saw' (inferential) が含意する直接的自覚的体験の欠如は、I saw には感じられない。現在と過去を区別した細かい考察が Leech にも、Quirk *et al.* にも見られないが、過去時制の場合は、発話時との間に時間が介在することにより、event としての客体化が行われているため、I see にありがちな未確認から来るあやふやさは消えている。同じことは (30) についても言える。

(30) I heard the bells ringing.

また、これが瞬間的知覚でないことは the bells ringing に表われる継続相から明白である。Quirk *et al.* が I heard the bell ring を「全体として見た出来事」(event seen as a whole) と言うのは、I saw について上述したのと同じ理由に加えて、the bell ring に示される完結相から来る読みでもある。また彼らは I could hear the bells ringing を「ある期間続く知覚」(perception over a period) と言うのであるが、the bells ringing の継続と平行的に知覚の確認が行なわれていると考えればよい。すなわち、単なる事実の報告にとどまらず、知覚確認の体験を想起しながらの発言である。これが正しければ、Coates のモダリティよりもアスペクトを重視した見方は皮相なものと言わざるを得ない。主語が1人称以外でも、やはり知覚確認の意味での「能力」に言及していると考えられる。澤田 (1993b) の「CAN/COULD (=Involuntary Perception) はその意識主体の知覚状態に関する内的描写である」(ハンドアウト、p.5) という見方は括弧の中を除けば正鵠を得ている。Involuntary perception は故意でない、不随意的な知覚ということであるが、それはむしろ can/could のあとに続く see,

hear などが受け持っており、can/could はそれをはっきり意識していることを示している。私的動詞といわれ、本人のみが意識する状態故に、can なしの hear, see も内的描写の性質がないわけではないが、can/could がつく場合のほうがより注意がそこに集中されていると言える。

主語が話者でないとき can+受動的知覚動詞は意識主体からの確認知覚の伝聞を表わしたり、次例のように話者の強い感情移入 (empathy) を示したりする。

- (31) When the doctor had finished his cup of tea, he looked at his watch and said that he must go: the midwife said that she would stay until Lucy arrived to relieve her vigil; but even as the doctor went down the stairs Jane heard the car draw up outside and know that Lucy was there. The doctor let her in: she could hear them exchanging remarks in the hall, and could hear the dry murmur and cough that indicated the presence of James, Lucy's husband.

'That must be my cousin,' said Jane to the midwife; it seemed the most personal remark that she had made in weeks. — Margaret Drabble, *The Waterfall*

- (32) Lucy left at five, in a taxi: saying she must get back to the children before the end of children's television. She said that she would be back again later for the night. Jane, from her bed upstairs, through the open door, heard her saying to James in the hallway.

'You'll be all right?' and heard James answering,

Can see/hear/...と Be seeing/hearing/...と

‘Of course, I’ll be all right.’ — *ibid.*

(32) の heard 及び (31) の最初に出る heard に較べて、あとに続く (31) の could hear のほうは、Jane が耳を澄ましている様子を彷彿させる。

感覚器官が刺激を受けて知覚が生まれ、それに気づいて確認する過程、つまり意図せずして、気がつけば感覚に注意が集中している状態が can+see/hear/...で表現されるが、この状態は能動的行為に踵を接しているものであり、能動的行為として客観視されたり解説されたりすると——澤田 (1993a) の言葉を借りれば、「外的描写」となると——、それは look や listen で表現される。冒頭で述べたように、最初から意図して積極的に刺激に反応しようとする、あるいは刺激を探し求める姿勢を示すのは look や listen であるが、仮に感覚の主体にあらかじめそのような能動的姿勢がなくとも、‘can+see/hear/...’の状態は外から見れば ‘look/listen/...’の行為として観察されることは十分ありうる。

Can+受動的知覚動詞の意味をこのように解釈すれば、(33)～(35)に挙げる be going to の用法についての Leech の説明がよりよく理解できる。

(33) There’s going to be a storm in a minute.

(‘I can see the black clouds gathering’)

(34) Watch it! That pile of boxes is going to fall!

(‘I can see it already tottering!’)

(35) Look! He is going to score a goal!

(‘I can see him moving up to the goal-mouth’)

説得力のある根拠の提示として can see が相応しいのである。次の can feel についても同じである。ここでは、(31)における That must be my cousin の must の場合と同様、So I cannot be standing up or lying down の cannot の出ている文脈に、つまり、これら認識様態法助動詞と

の cohesive な関係にも注目すべきである。

- (36) I am sitting. I know this because I can feel my body pressing against the seat. I can also feel that the weight of my body is not pressing against my feet or over one whole side of my body. So I cannot be standing up or lying down.¹¹⁾ — W. L. Beauchamp *et al.*, *Science Problems*, bk. 3

(37) は (37') の翻訳である。

- (37) ...but actually all I did there was to receive a vast amount of exchange money from the window. A packet wrapped in yellow paper slapped the palm of my left hand. I felt the money inside. — L. Dunlop and J. M. Holm (trans.), *Palm-of-the-Hand Stories by Yasunari Kawabata*

- (37') …實は私はその窓口から莫大な金額の為替を受け取ったばかりなのだ、黄色いボオル紙の包みで左手の掌をパンパン叩いている。中に為替があると感じている。——川端康成『鋸と出産』

訳者は「感じている」を I felt で済ませているが、大事なものの存在を確認していると取れるこの場面では、I could feel でないと適訳と言えないだろう。¹²⁾ I was feeling でももちろん駄目である。

4. (8) の can が主語の恒常的な能力についての経験的知識に基づく客観性の強い判断であるのに対して、(9) をはじめとして本論で問題にした can は現実の知覚と直結した主観性の強いものであるという違いはあると

しても、ともに能力のモダリティを認めることができるのであって、われわれの can を、能力の意味を失い状態を示す虚辞になり下がったもののよう
に扱うわけにいかないことは十分に立証できたと思う。

受動的知覚動詞の進行形もまたモデルであることが分かったが、モダリティの中味が異なるのであり、それは叙述内容の一時的妥当性の強調を適当
だとする話者の判断である。一時性は「安定を欠き、断定できない、仮の姿」
に結びつくので、I am seeing/hearing things のような幻覚の表現¹³⁾とか、
先の I am seeing spots ((18)) が、可能になるのである。(10) も、先刻
のよく聞こえなかったときと対照的に今ははっきり聞こえるが、不安定さは
否めないものである。結果的に注意を集中して確認している知覚状態の内的描
写 can hear と大きく隔たるものである。実際のところ、受動的知覚動詞
が進行形になるのは、この他には (25)~(27) に挙げた同時性→同一性→行
為解説の場合に限られるようである。Jorgensen (1990) から借用する次例
もそのように解釈したほうがよい。ここには could hear も含まれていて興
味深い。

- (38) I could hear the door of the guest room open. He [i.e.
the undertaker] was seeing her dead. I had not, but I
had no wish to;... — Graham Greene, *The End of
the Affair*

冒頭に掲げた笑話に戻ろう。いまさら説明するまでもなく、患者は I'm
seeing/I've been seeing spots (before my eyes) と言ったか、あるいは
I've got spots before my eyes と言った筈である。次例では、患者の注意
が視覚そのものに向けられていることもあり、医者の方患者知らずというか、
笑い話にするためには can see が良いのであろう。それにしても悪い冗談
ではある。

- (39) ...take the discomfiture of Dr. Irwin Levy, Trenton ophthalmologist, when he had a patient who complained of seeing dark spots constantly in front of her eyes.

"Glasses should help," said Dr. Levy, as he wrote out the proper prescription.

When the patient reported back a week later, he asked her what progress she was making. "Glasses help, I hope?"

"They certainly do, Doc. I can see the spots much clearer now." —Golden, *For Doctors Only*

注

- 1) 本論文は筆者が『英語青年』第139巻第9号(1993・12)に発表した論文(「can + 受動的知覚動詞」の意味)で取り扱った問題の詳論であり、重複のあることをお断りしなければならない。
- 2) Leech が言い換えているような意味であるとしても、彼の分類ではむしろ活動動詞(activity verb)と見做さるべきで、change, grow などのような process verb ではない。この文脈で過程動詞と解釈する根拠として、彼は process of perception が強調されているからだと言う。これはおかしな話であって、聴覚のメカニズムに言及しているわけでもないだろうし、副詞 clearly と考え合わせて、「今ははっきり聞こえています」がより良い解釈であろう。
- 3) 参照文献が1点であって既に言及ずみのときには、人名のみを記す。以下同様。
- 4) 進行形に関するモダリティを扱ったものに Woisetschlaeger (1976)、Goldsmith and Woisetschlaeger (1982)、King (1983) などがある。Woisetschlaeger は進行形 be+V-ing の be を aspect 動詞の一つとしての本動詞と、epistemic な助動詞としての be とに分け、後者の働きは主観的に状況把握の仕方を変えるものであって、「構造的事実」としての単純形に対して、

進行形は「現象」としての状況把握だと言う。しかし進行形として一つに纏めてその統一的な文法的意味を説くべきである。Goldsmith and Woisetschlaeger は epistemic という言い方をやめ metaphysical に後退させているが、構造／現象説は Woisetschlaeger と変わっていない。King もアスペクトは「状況に対する話者の見方である」として主観的側面を強調するが、進行相即不完結相であり「状況のまん中を眺める」もの、と言うだけでは物足りない。The whole family is wanting to go to the Bahamas for Easter という文で、進行形は「その wanting という状況のまん中を眺めている」と言っているが、余りにも 'metaphysical' な説明である。

- 5) 同様の解釈が Hofmann and Kageyama (1986) に示されている。なお、Iterative sense が含意されるとき see が進行形になるという Gruber (1967) の不十分な説明に引きづられてか、John is seeing spots を「ジョンは観光地を見て廻っている」といしている（『現代英文法辞典』（三省堂、1992）, p. 1020）のは明らかな誤訳である。これは、普通硝子体混濁が原因で、目の前に黒い点が見える症状に言及しているのである。この文に反復の要素は認められるが、それだけでは不十分である。というより、それは決して進行形のもつ共通の基本的意味ではない。
- 6) Hofmann and Kageyama は、'punctive verb' に反復の解釈が与えられるのは通例主語または目的語が複数であるとして、この例を挙げているが、目的語 '2m' が '1m' なら違う解釈になるというわけでもなく、この点でも不適切な例文である。手許に適切なものがないので、自作の例文で間に合わせておくと、The naughty boy was smashing the windowpanes when the teacher arrived ならば彼らの主張に合うだろう。
- 7) Leechが口語的誇張表現と見るのに対して、Goldsmith and Woisetschlaeger は、烙印を押すことを避けた、より弱い表現形式だという。彼らの「構造」対「現象」説から導かれる結論として理解できるが、Leech を含めた大方の論者と同じく、この種の表現にこめられるのは常に批判的な感情であるというのには疑問を感じる。A man who is always giving people lifts (Leech) や Old

Lilly is always feeding the pigeons in the park (Goldsmith and Woisetschlaeger) に、逆に積極的な評価の態度を読み取ることが果して不自然であろうか。King (1983) がそのような解釈は文脈から来るもので、‘Old Lilly is such a kind person. She’s always feeding the pigeons in the park.’ もあり得るとしているのに賛成である。

- 8) *Deeper Into English Verbs Through Masterpieces* (金星堂、1992) に収録。原作は遠藤周作『沈黙』(新潮文庫版 p. 218)。
- 9) Cf. 中右 実「意味論の原理(1)」、『英語青年』Vol.130 (1984), 24。
- 10) Sag が Lakoff (1966) の論旨を要約して紹介する際に *What I did was hear the music を *What I did was hear the concert に変えてしまう不用意を指摘しなければならない。Lakoff の original は文脈不十分ながら「音楽が聞こえた」と取れるが、hear the concert なら文脈次第で文頭の * を不要とする解釈もありうる。
- 11) この例文中に現れる stand up, lie down の進行形も注目に値する。筆者は既に句動詞 stand up の状態性を詳しく論じている(「状態を表わす stand up」、『英語青年』Vol.117 (1972)、pp.757f 及び ‘Stand up vs. Stand Up’, *Journal of Osaka University of Foreign Studies* 29 (1973), pp. 45-57) が、いまでも stand up の durative な性格を明らかにした辞書は少なく、まして rise, get up, get to one’s feet との区別を説明しているものは皆無である。副詞 up が付いて stand は動作を示す非状態動詞に変わると言えば、stand up が命令文と進行形のいずれにもなるので一見都合の良い解釈に思えるが、述語の状態性について ad hoc な解釈を慎しむべきことは(16)に関連して述べた通りである。命令文 Stand up. も「立っている以外の状態」の人に「立っている状態」を求めているのであって、求められた人は「起立」という動作で応ずるに過ぎないと考えるほうが、進行形になったときの意味(「立ち上がるころ」でなく「立っている」)と矛盾が生じない。
- 12) (37)には他にも誤りがある(「…ばかりなのだ」の解釈)。拙訳を参考までに掲げておく。

Can see/hear/...と Be seeing/hearing/...と

...Actually I have just received an order for a vast sum of money at the wicket. I am flapping the palm of my left hand with a packet wrapped in yellow cardboard, in which I can feel the money order contained. — *THE REEDS*, Vol.13 (1972), p. 50

13) Erik Jorgensen (1990) に多くの用例が見える。

参考文献

- Alexander, L. G. *et al.* (1975) *English Grammatical Structure*. Longman.
- Binnick, R. I. (1991) *Time and the Verb*. Oxford Univ. Press.
- Coates, J. (1983) *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. Croom Helm.
- Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge Univ. Press
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
- van Ek, J.A. (1969) "The 'Progressive' Reconsidered", *English Studies* 50, pp. 579-85.
- Goldsmith, J. and E. Woisetschlaeger (1982) "The Logic of the English Progressive", *Linguistic Inquiry* 13, pp. 79-89.
- Gruber, J. S. (1967) "Look and See", *Language* 43, pp. 579-85.
- Hofmann, Th. R. and T. Kageyama (1986) *10 Voyages in the Realms of Meaning*. くろしお出版.
- Joos, M. (1968²) *The English Verb*. Univ. of Wisconsin Press.
- Jorgensen, E. (1990) "Verbs of Physical Perception Used in Progressive Tenses", *English Studies* 71, pp. 439-444.
- King, L. D. (1983) "The Semantics of Tense, Orientation, and Aspect in English", *Lingua* 59, pp. 101-54.
- Kuno, S. (1970) "Some Properlies of Non-Referential Noun Phrases". In: R. Jakobson, S. Kawamoto(eds.) *Studies in General and Oriental Linguistics*. TEC.

- Lakoff, G. (1966) "Stative Adjectives and Verbs in English", *Harvard Computational Laboratory Report No. NSF-17*.
- Leech, G. N. (1987²) *Meaning and the English Verb*. Longman.
- Lewis, G. L. (1967) *Turkish Grammar*. Clarendon Press.
- . (1989²) *Teach Yourself Turkish*. Hodder and Stoughton.
- 毛利可信 (1982³) 『英語の語用論』大修館書店.
- 中右 実 (1984) 「意味論の原理(1)」『英語青年』Vol. 130, pp. 24-26.
- Palmer, F.R. (1974) *The English Verb*. Longman.
- . (1990²) *Modality and the English Modals*. Longman.
- Quirk, R. *et al.* (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Sag, I. A. (1973) "On the State of Progress on Progressives and Statives". In: C.-J. Bailey, R.W. Shuy (eds.), *New Ways of Analyzing Variation in English*. Georgetown Univ. Press.
- 澤田治美 (1993a) 『視点と主観性』ひつじ書房.
- . (1993b) 「法助動詞 can/could + 知覚動詞の語法」英語語法文法学会第1回大会シンポジウム.
- Woisetschlaeger, E.F. (1976) *A Semantic Theory of the English Auxiliary System*. Indiana Univ. Linguistic Club.